

サキ(ヘクター・ヒュー・マンロウ)作
志村未帆訳

聖人とゴブリン

The Saint and the Goblin, by Saki (H. H. Munro), Translated by Miho Shimura

古い大聖堂の一角にひっそりとうがたれた窪みに、小さな石の聖人が立っていた。聖人がどんな人物だったか覚えていない人はほとんどいなかったが、だからこそ尊敬を集めているともいえた。少なくとも、子鬼のゴブリンはそう言った。ゴブリンは趣あるみことな石の彫刻で、聖人が納まっている窪みを見おろすように、向かいの壁に張りだしたコーベルに彫られていた。ゴブリンは大聖堂の住人のなかでも指折りの面々とながりがあった。たとえば聖歌隊席や内陣仕切りに施された風変わりな彫刻。はるか高く、屋根の上に据えられたガーゴイルだってお仲間だ。天井のアーチや地下の納骨所で、木や石や鉛の体を伸ばしたりくねったりしている奇怪な獣やこびとたちは、みんなどこかしらゴブリンに似ていた。このためゴブリンは、大聖堂という社会では一目置かれる存在だった。

小さな石の聖人とゴブリンはじつに仲良くやっていた。といつても、二人はたいていの物事を異なった角度から眺めていた。聖人は昔ながらの博愛主義者で、この世は善きものだけれど改善の余地がある、という考えだった。彼はとりわけ、貧しさにあえぐ教会のネズミたちに心を痛めていた。一方のゴブリンは、この世は悪きものであるが、余計な手出しはしないのが一番だという考えだった。教会のネズミは貧しいが、それが彼らの役割なのだ。

「そうはいつても、かわいそうでたまらないよ」聖人は言った。

「それでいいのさ」ゴブリンは言った。「ネズミたちを哀れむことが、きみの役割なのだから。連中が貧しくなくなったら、きみはお役ご免、名ばかりの聖人になってしまふよ」

ゴブリンは、「名ばかりの聖人」とはどういう意味なのか、聖人に聞き返してほしかつたが、相手は石のように黙りこくってしまった。ゴブリンの言う通りかもしれない、聖人は思った。それでも、冬がやってくる前にネズミたちに何かしてやりたかった。彼らの生活はそれほど惨めだったのだ。

聖人がこのことを思いめぐらせていると、足元に何かが落ちてきて、チャリーンと乾いた音を立てたので驚いた。真新しい、ぴかぴかのターレル銀貨だ。

大聖堂に棲みついていてはいるコクマルガラスは光るものを集めていた。ちょうど一羽が銀貨をくわえ、聖人の真上にせり出してはいる蛇腹装飾に舞い戻ったのだが、聖具室のドアがバタンと閉まったのに驚いて落としてしまったのだ。黒色火薬が発明されてからというもの、鳥たちは神経をとがらせていた。

「それはなんだい？」ゴブリンがたずねた。

「ターレル銀貨だよ」聖人は答えた。「なんて運がいいんだろう。これでネズミたちに何かしてやれる」

「でもいつたいどうやって？」ゴブリンはたずねた。

聖人は頭をひねった。

「いつも床を掃いている会堂番の女の夢に現れて、こつ伝えるんだ。ぼくの両足のあいだにターレル銀貨を見つければいいから、それで小麦を買ってきてこの祭壇に供えなさい、とね。彼女は銀貨を見つけたら、あれは正夢だったんだと気づいて言った通りにしてくれるだろう。そうすればネズミたちは冬中食べるものに困らない」

「もちろんきみならできるさ」ゴブリンは請けあった。「ぼくなんて、消化に悪いものをたらふく食べた人の夢に登場するのがせいぜいだ。会堂番が相手ではまず見込みがない。聖人さんというのはすごいものだなあ」

この間、銀貨は聖人の足元に転がったままだった。傷一つなくきらきらと輝き、選帝侯の紋章がくつきりと浮き彫りになっている。聖人は、滅多にない幸運が舞いこんだのだから、決断を早まっではいけないと考えはじめた。もしかすると、見境なく施しを与えるのはネズミのためにならないかもしれない。結局のところ、貧しいのはネズミの役割なのだ。ゴブリンがそう言っていたし、ゴブリンはたいして正しかった。

「考えてみたんだけど」聖人はその当人に言った。「小麦ではなくて、一ターレル分のろうそくを祭壇に飾ってもらつぼうがずっと良いような気がするんだ」

聖人はつねづね、たまに祭壇にろうそくを灯してもらえたら、だいぶ見栄えがするだろうにと思っていた。でも、人々は聖人が誰だか忘れていたので、わざわざそんな気を遣ってくれるはずもなかった。

「ろうそくのほうがよっぽどふさわしいさ」ゴブリンは答えた。

「ああ、まちがいはなくふさわしい」聖人はうなずいた。「それにネズミたちは燃えさしを食べられる。ろうそくの燃えさしは、なにしろ栄養があるからね」

ゴブリンは品がいいので目配せしたりしなかった。それに石のゴブリンなのだから、そもそも無理な話だった。

「まあ、本当にあるじゃないか」翌朝、会堂番の女が言った。女は光り輝く銀貨をほこりつぱい床から拾いあげると、汚れた手の中で何度もひっくり返した。

それから硬貨を口もとに運び、試すようにかじりついた。

「まさか食べるつもりじゃないだろうな」聖人は驚き、石のように冷たい視線を女に浴びせた。

「いやはや」女はややかん高い声で言った。「こんなことがあるとはねえ。それも聖人さまときたものだ」

それから、会堂番の女は思いもよらない行動にでた。ポケットのなかをさぐって使い古しのひもを取り出すと、銀貨のまわりに十文字にくくりつけ、大きな輪をつくって小さな聖人の首にかけたのだ。

そして女はどこかに行ってしまった。

「どうやら、当てが外れてしまったようだ」ゴブリンは言った。

「きみのお友だちがつけている飾りはなにかね？」近くの柱のてっぺんに彫られた飛竜のワイバーンがたずねてきた。

聖人はくやしさのあまり悲鳴をあげそうだったが、石の体ではそれも無理だった。

「それは……エヘン、たいへん貴重なコインでありますぞ」ゴブリンが上手いこと切り返した。

やがて、小さな石の聖人の祭壇に、得がたい捧げ物が奉られたという噂が大聖堂中に広まった。

「どうやら、ゴブリンの善意には敵わないようだな」聖人はひとりごちた。

教会のネズミたちは相変わらず貧しさにあえいでいた。しかしそれが彼らの役割だった。

(完)